

小学校社会科における多面的・多角的なものの見方や考え方の育成（第一年次）

－震災以降の地域素材を活用した単元構成の工夫を通して－

長期研究員 平野 俊一

《研究の要旨》

複雑で変化の激しい社会の中を生きていく子どもたちに、小学校段階から物事を多面的・多角的に吟味し見定め、いく力を育てていくことは重要なことである。大震災を経験した福島県だからこそ、社会科において、震災以降の地域素材を教材化し、現実の課題と向き合わせながら社会的事象について学ばせることで、復興を担う子どもたちに多面的・多角的なものの見方や考え方を育成していくことができると考え、実践研究を行った。

I 研究の趣旨

小学校社会科の学びは、様々な社会的事象と出会い、そこに携わる「人・もの・こと」について学習することから新しい発見をしたり、つながりや関わりを見付けたりするところにあると考える。その学びの質を高めるために、魅力ある「人」の姿とその人に関わる「こと・もの」を教材とし、効果的に学習させることができるよう単元構成を工夫することが大切である。

小学校3年生の社会科では、自分たちの住んでいる地域について学習する。地域の魅力的な教材は、子どもたちの学習意欲を高めることにつながる。そこで、震災後、地域で復興に向けて努力している「人」の姿を教材化することで、子どもたちに、目の前の社会的事象をより身近なものとしてとらえさせることができるようにした。さらには、子どもたちに社会的事象のもつ様々な面や立場からの考えの違いなどに気付く見方や考え方を育むことで、多面的・多角的に社会的事象を見たり考えたりする力の育成をめざした。

震災からの復興を担う福島に生きる子どもたちだからこそ、社会的事象と出会ったときに、様々な面から、そして様々な角度からその事象を見たり、又は自分で物事を考え、判断し、行動したりすることができる力がより必要であると考え、本研究主題を設定した。

II 研究の概要

1 研究仮説

社会科の指導において、以下のような視点に基づいて単元を構成すれば、自分のこととして社会的事象をとらえ、生活と関わらせながら、多面的・多角的に考え、判断できる子どもを育てることができるであろう。

【視点1】 主体的に社会的事象を学ばせる震災以降の地域素材の活用

【視点2】 社会的事象を多様な面や視点から考えさせる工夫

【視点3】 自己の学びの変容に気付かせる工夫

2 研究の内容と実際

(1) 授業実践における手だて

① 【視点1】に基づく手だて

身近な地域において、震災以降様々な課題に取り組んでいる「人」に関わらせることで、より主体的に学習に取り組むことができるようにした。また、震災前後での地域社会における取組の違いについて考えさせることで、課題意識をもって地域素材を見たり考えたりすることができるようにした。

② 【視点2】に基づく手だて

子どもたちが社会的事象のもつ様々な面について気付いたり、様々な視点で物事を考えたりできるように、人材の有効活用、複数回の見学学習、家庭との連携などを行った。また、学習したことが視覚的にとらえられるように、構造的な板書構成を工夫した。

③ 【視点3】に基づく手だて

子どもたちが新たな見方や考え方に気付き、それを自分の言葉で表現できるよう、「社会科日記」「イメージマップづくり」を学習活動に取り入れた。また、子どもたちの気付きの質を高める言葉かけや評価を通して、自己の変容を実感させることができるようにした。

(2) 授業実践の実際と考察

研究対象 小学校3年生（1クラス 22名）

① 実践授業I「農家の仕事」について（15時間）

A 単元構成について

「農家の仕事」の単元を構成するに当たり、次ページの図1のように単元構想図を考えた。震災以降、学区内で復興に向けて熱心に仕事に取り組んでいる「きゅうり農家のYさん」を単元を貫く教材として位置付けた。Yさんの復興に向けて努力する姿や、その背景にある風評被害や出荷状況などの様々な面を多面、そこに関わる様々な立場の人の考えを多角としてとらえ、農家の仕事を多面的・多角的に学習させることができるようにした。

また、学習を通して生み出された新たな問いを子どもたちが解決していけるように、複数回の見学学習や家庭での聞き取り調査などを計画的に位置付けた。

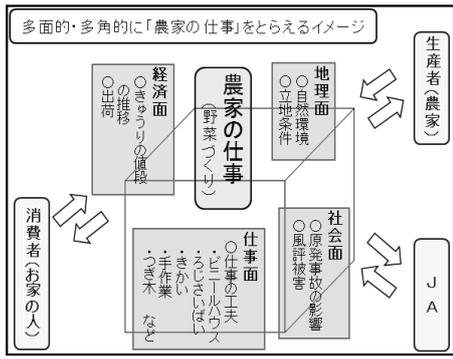


図1 「農家の仕事」の単元構想図

イ 授業の実際について

子どもたちは、きゅうり農家やJAの見学を通して、農家とJAの仕事のつながりについて考えることができ、共に安心・安全を第一に考えて仕事をしていることを理解することができた。

単元の後半では、「きゅうり1kgのねだんの推移」のグラフ(図2)を提示し、震災後の急激な値段の下落や収穫量の減少などについてその原因を考えさせた。そこから生まれた問いの解決のために、Yさんを学校に招き、直接その理由や社会背景について話を聞く機会を設けた。子どもたちは、震災以降、風評被害があったことを初めて知り、農家の方の思いや苦勞、その困難を乗り越えるための様々な工夫や努力なども知ることができた。また、「福島県産の野菜に対してどう思うか」という家庭への聞き取り調査を通して、実際に野菜を買って食べている自分の家族や各家庭の多様な考えを知ることができた。単元のまとめとして、三者の立場で、考えや取組をまとめた(図2)。

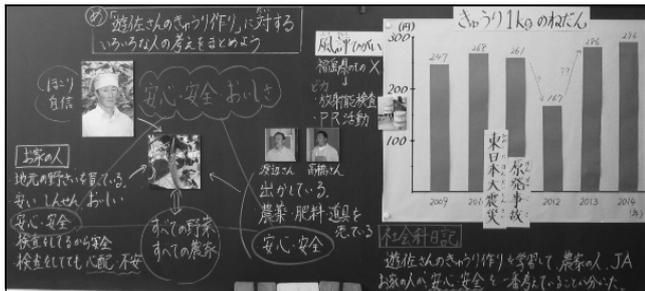


図2 三者のつながりをまとめた板書

ウ 子どもの学びの姿

子どもたちは、「農家の仕事」を、Yさんの姿やJAのWさん、家の人、それぞれの立場から多面的・多角的に見たり考えたりすることができた。その結果として、子どもたちは、三者が安心・安全を第一に考え、図2のように安心・安全でつながっていることを理解し、農家の仕事に対して自分なりの考えをもつことができた。また、Yさんだけでなく、福島県の農家の人は同じ思いで仕事をしていることも理解することができた。

エ 「社会科日記」によるまとめ

毎時間の終わりに、授業を通して分かったこと、心に残ったことなどを「社会科日記」に書く活動を行った。多面的・多角的に見たり考えたりしてきたからこそ、社会的事象に対する気付きが増えてきたことが見て取れる(図3)。また、子どもの気付きを高める評価の工夫として、「A君は三者が安心・安全でつながっていることに気付いたんだね。みんなの共通する思いや願いに気付くことができたね」といった言葉かけを行った。子どもたちは自分の書いた「社会科日記」から、気付きが変容している自分の姿を実感することができていた。

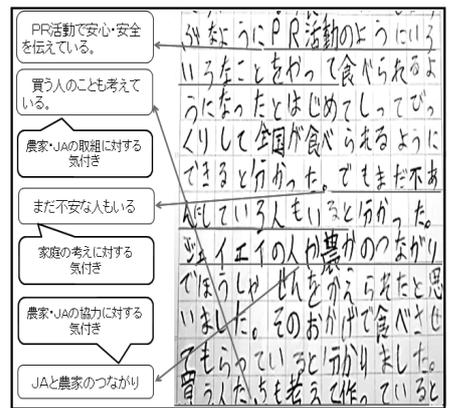


図3 A君の「社会科日記」

② 実践授業Ⅱ「店ではたらく人」について(13時間)

ア 単元構成について

「店ではたらく人」の単元を構成するに当たり、図4のように単元構想図を考えた。本単元「店ではたらく人」の学習に、前単元での学びをつなぐことにより、生産-販売-消費のつながりを学習できるように計画した。前単元「農家の仕事」と同様に、スーパーにおける仕事の工夫や、その背景にある風評被害や売り上げなどの様々な面を多面、そこに関わる様々な立場の人の考えを多角としてとらえ、指導に当たった。

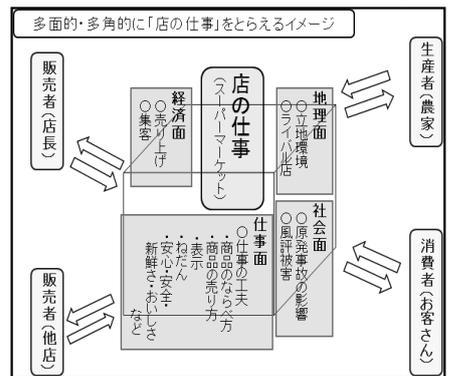


図4 「店の仕事」の単元構想図

イ 授業の実際について

子どもたちは、近くのスーパーマーケット(以下、スーパー)を見学し、見付けてきたスーパーの仕事の工夫についてまとめた。店長のSさんの話から、「放射能検査などをして安心・安全なものだけを売っている」「避難してきている人たちのために各種のサービスを行っている」など、震災以降の新しい取組があることを知ることができた。また、家庭への「買い物聞き取り調査」の結果から、消費者の店に対する思いや考えの中にも安

心・安全が入っていることが分かった。さらに、消費者のいろいろな思いに答えようと店も工夫、努力していることを理解することができた。単元のまとめとして、三者の立場で考えや取組をまと

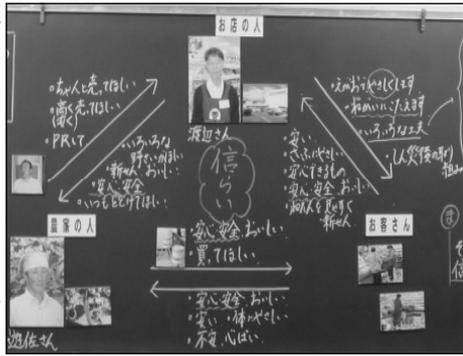


図5 三者のつながりをまとめた板書
ウ 子どもの学びの姿

「農家の仕事」で学んだ安心・安全という言葉が、「農家の人」「お店の人」「お客さん」のどの考えにも入っており、子どもたちは、図5のように三者が安心・安全でつながっていること、その上に信頼関係が成り立っていることに気付くことができた。また、震災以降、消費者の安心・安全に対する関心がより高くなったことで、生産者、販売者の取組も変わってきたことも理解することができた。子どもたちは、「うそをついたり、ごまかしたりすると、信頼されなくなる」「信頼されるように、一生懸命安心・安全に気を付けてものを作ったり売ったりしている」「お客さんは店を信頼して買い物に行く」などと「社会科日記」にまとめており、三者のつながりを「信頼」という言葉で理解している姿が見られた。

エ 「イメージマップ」による気付きの変容

単元の初めと終わりにスーパーの「イメージマップ」を作成し、スーパーに関連してどんな既有知識や見方をもっているか、また、書いたもの同士の関係を考え、どのようにつながられるか書き表した。

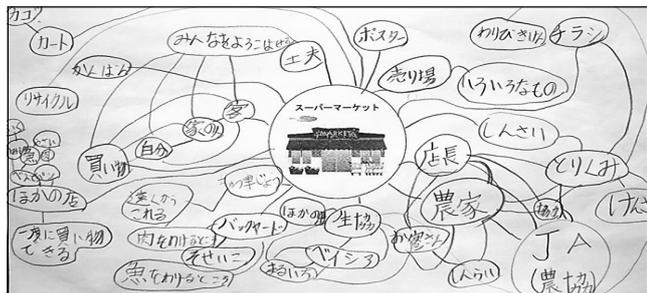


図6 単元の終わりに書いた「イメージマップ」

単元の初めは、直接自分の目に見えたものを書いていたが、単元の終わりになると、図6のように考えたことや、つながりを意識して書いたものが増えてきた。スーパーの仕事を多面的・多角的に見たり考えたりしてきた子どもたちは、販売者の工夫だけでなく、生産者－販売者－消費者のつながりを意識して言葉を書くことができるようになってきた。子どもたちは、新たな「人・もの・

こと」に関する言葉のつながりを書くことができるようになったことで、自己の学びの深まりに気付くことができていた。

Ⅲ 研究のまとめ

(1) 研究の成果

子どもたちにとって、身近な地域で生産・販売に関わる「人」、しかも震災以降様々な思いや願いをもって仕事に取り組んでいる「人」や、その人が関わる地域素材を学習対象としたことで、自分に関わることとして主体的に社会的事象について考えることができた。「農家の仕事」「店ではたらく人」の学習を通して、社会的事象と自分とのつながりについて考えるようになった子どもたちの割合が、36%から95%に増えた。ものの方や考え方が変わってきた子どもたちの姿が意識調査の結果からも分かった(図7)。

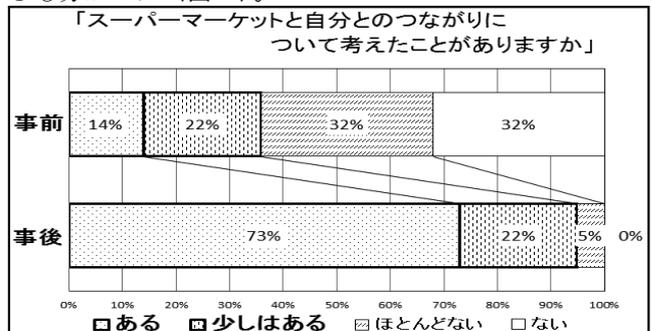


図7 社会的事象への気付きについての意識調査

子どもたちは、「農家の仕事」「店ではたらく人」の学習を通して、生産者、販売者、消費者の共通の思いである「安心・安全」や三者のつながりである「信頼」に気付くことができた。震災以降の地域素材を教材化し、多面的・多角的なものの方や考え方を育てていくことは、新しい見方や考え方に気付かせ、物事の本質を理解させる点で有効だった。

(2) 研究の課題

刻々と変化する社会の中で、子どもたちに何を身近な問題として考えさせていくかが重要である。子どもたちが、目の前の社会的事象を多面的・多角的に見たり考えたりすることができるように、教材の開発、そして単元構成の工夫が今後も求められる。

子どもたちの多面的・多角的なものの方や考え方がどう向上したかを見取るための評価方法についても検討していかなければならない。「イメージマップ」「社会科日記」などに見られる子どもたちの気付きをどう評価するか、さらには、気付きの質を高めるための評価方法の工夫について、研究を深めていきたい。